



静岡市茶流通業史編集資料 1

座談会  
「ちやつきりぶし」ができた頃

静岡茶商工業協同組合発行

# 二 挨拶

静岡茶商工業協同組合

理事長 小林 真治

わが国の茶業は、明治維新の幕開けとともに輸出産業として発展、その後国内需要へと移行し現在に至っております。

お茶の消費形態も、最近では緑茶缶ドリנק、ペットボトル、粉末茶などの新製品の出現により多種多様化してまいりました。

しかし、茶業が静岡の基幹産業として今日あるのは、多くの先人達の研鑽とたゆまぬ努力の賜物であることを私達は忘れてはなりません。

そこで、本組合に編集委員会を設置し、静岡市内の茶商とその関連業者等の歩みを、静岡市茶流通業史として編纂・発行することになりました。

静岡市茶業流通業史発行までの前段階として、テーマごとに冊子にまとめていくこととなり、今回第一回目の冊子発行となりました。引き続き各方面の先輩諸氏からの聴き取り調査や写真等の資料収集をしながら編纂作業をし、数年後には一冊の流通業史として発行していきたいと存じます。

今日まで先人達により培われてきた茶業をこの流通業史に編纂することにより、現在あるいは将来において、静岡茶の進歩とさらなる発展のよりどころとなればと思います。

最後に、本書発行にあたり取材のご協力をいただいた方々、また貴重な資料をご提供下さり、ご指導ご協力を賜った方々に対し、心より御礼申し上げます。ご挨拶と致します。

## 刊行にあたって

編集責任者

中村 羊一郎

静岡茶商工業協同組合は、静岡県の基幹産業である茶の普及に大きな役割をはたしてきました。市内の茶商が、一貫してよい茶の確保と安定供給

に努めてきたことが、静岡茶の名声確立に貢献したといっても過言ではありません。その結果、静岡茶は国内にとどまらず、戦前には静岡からアメリカに大量の茶が輸出され、大勢の外人バイヤーが静岡の町を闊歩したこともあれば、戦後にはアフリカにも緑茶が輸出されたこともありました。現在では健康志向もあつて、ドイツなどのヨーロッパにも茶の販路を拡大しつつあります。

二十一世紀を間近にひかえた今、このような静岡市の茶商の歴史を振り返り、一冊の本にまとめておくことは、ひとり茶商のためだけでなく、静岡のお茶の歴史を考える上でも意義あることであり、地域産業発展にとつても何らかの示唆を与えるものになるにちがひありません。組合では昨年からの、そのための資料収集を始めましたが、何分にも昔のことですから十分な記録がありません。そこでまずは、昔を知る方々に集まっていたいただき、座談会のなかでいろいろと思ひ出を語っていただくことにしました。先輩の方々の実験は、本作りの重要な資料になるはずで

座談会はお茶に関係するさまざまな職種ごとに開く予定ですが、まずは第一回目として、ちよつと異なつた角度からお茶屋さんの姿を浮かびあがらせようと思ひ、商売の宴席に欠かせなかつた芸者さんから、当時の様子を聞いてみることにしました。お茶といえはこの歌、といわれるほど縁が深い「ちやつきりぶし」誕生の頃の様子やら、戦前の静岡の文化を支えたお茶屋さんたちのエピソードが出てきます。なお、座談会記録の後には、「ちやつきりぶし」にまつわる話を参考までに書きました。

次号には、輸出茶に関わつた方々の座談会をまとめる予定です。

平成十二年三月二十七日

座談会

「ちやつきりぶし」ができた頃

座談会記録 1

日時・平成十一年十一月三日  
参加者・志郎姐さん、竹栄姐さん、  
こはん姐さん

聞き手・中村羊一郎  
立会い・望月浩  
会場・なか川蒲焼本店  
(静岡市宮ヶ崎町)

らいたわけ。

中村 おねえさんっていうのは半玉からそう呼ばれるんですか。

志郎 いいえ。十四、十五の二年ぐらいは半玉。この時はお酌ともいうんですよ。

それから、十六歳になると一本のおねえさんになって、もう税金も払うわけなんですよ。

中村 ほう。じゃ当時、一本立ちした、おねえさんがずい分たくさんいたんですね。

志郎 そうですね。

中村 ところで、北原白秋が「ちやつきりぶし」を静岡でつくったのが昭和二年ですが、その時志郎ねえさんは。

志郎 まあ、ちよろちよろ、なり立てぐらいでしたよ。

中村 その頃、静岡電鉄、今の静岡鉄道が白秋さんという偉い先生を呼んで、何かやってるそうだという噂は聞いたことがありますか。

志郎 噂というより、毎晩ていうくらい白秋先生をお呼びして、何かお話をしてくっしやるのを見ましたから。でも私たちは、まあお酌だから、あんまりねえ、タッチしませんでした。その時はおねえさんたちが十人ぐらいついてま

だ大正時代ですよ。

志郎 来たときは大正ですけど…。

中村 それですぐに昭和になったっていうわけですよ。

志郎 ええ。それでじきに、半玉に出ました。

その頃は、半玉（玉代すなわち料金が半分の芸者）が静岡でも五十人ぐらいはいたんですよ。

中村 志郎ねえさんが属した検番（芸妓の取

次ぎや玉代の清算をするところ）は何いうところなんですか。

志郎 静岡検番。

中村 当時静岡には静岡検番一つだけでしたか。

志郎 そう、一つしかない。二丁町にも検番

ていうのがありましたけどね。これは廓の中だけのものですかね。それで検番ですけど、全部でお酌が五十人ぐらいいて、おねえさんたちが三百人ぐ

「ちやつきりぶし」の誕生  
(ひらめきを与えた芸者の一言)

中村 志郎ねえさんは、何年生まれですか。

志郎 生まれは、明治四十年四月の十日。

中村 静岡？

志郎 東京です。

中村 いくつおのときに静岡へ来たんですか。

志郎 十三くらいかな。

中村 それで、ずっとこのお仕事。

志郎 そう、学校卒業してからだから、十三からずっと。

中村 竹栄さんは何年生まれですか。

竹栄 大正十二年。

中村 静岡生まれ？

竹栄 ええ、そうです。

中村 志郎ねえさんが静岡に来たときは、ま

したね。そのおねえさんたちが話して  
たんですけど、先生なかなかほかどら  
ないらしいのよね。仕事が。それで二  
丁町へ、みんな連れて行ってあげた  
んですって。そしたらそこのおねえさ  
んが出てきて、お天気を見てね、「あ  
あ、今日はきやあるがわからあした  
は雨ずらよ」って言ったそうなの。そ  
れを聞いて、わかつたらしいの、先生  
ほう、その時ひらめいたってわけだ  
か。

志郎 それで「ちゃつきりぶし」がすぐでき  
ちゃったんですって。

中村 なるほどね。メ吉ねえさんという人だ  
そうですね、それを言ったのは。その  
話はすぐに噂として流れてきたんです  
か。

志郎 いえ、私たちはいつも行ってますでし  
よ、先生のそばへ。それでわかつたわ  
け。それがもとで先生は「ちゃつきり  
ぶし」が、どんだんはかどったそうで  
す。

中村 メ吉ねえさんという人は、当時幾つ  
ら이었다んですか。

志郎 随分お婆さんですけども、三十になっ  
たかならないんじゃないんですか。



志郎さん

中村 志郎ねえさんは口きいたことある？メ  
吉ねえさんと。

志郎 ありますけど。

中村 どんな感じの人だったんですか。

志郎 やっぱり田舎のおばあさん。(笑)そ  
う言っちゃ悪いですけど、まあね、田  
舎の方です。

中村 竹栄さんは知ってる？そのメ吉ねえさ  
んて人。

竹栄 知りません。だから「ちゃつきりぶし」  
の由来を伺ったときに、その名前を知  
ったんですけどね。

志郎 だけど、有名なおねえさんでしたもん  
ね。

中村 どういう意味で有名だった。

志郎 何かほら、いろいろ芸も、昔の芸でし  
ようけどね、なすって。一番幅きか  
せてたらしいのよね、二丁町でね。

中村 二丁町には当時芸者さんて何人ぐらい  
いたんですか。

志郎 それでも、二、三十人はいたんでしょ  
うね。

中村 すると、その二丁町の廓の中で、お座  
敷を務めているわけなんですな。

志郎 はい。

中村 で、外にはあまり出てこない。

志郎 うん、まあね。私たちはお客さまをお  
連れして伺いますけど、向こうはあん  
まり外には出てらっしゃらない。

中村 こちらから中に入ることはあった。

志郎 はい。

中村 志郎さんの娘の頃の時に見た場合、白  
秋先生って、どんな感じの人でした。

志郎 紳士でしたよ、紳士。

中村 ジェントルマンですか。

志郎 いや、紳士で、お酒もおあがりになる  
し、芸もおやりになるし。

中村 芸もできたんですか。どんな芸をした  
んですか。

志郎 まあいろいろ、お座敷芸をね、やって  
らっしゃいましたよ。

中村 ほう。そうすると、白秋先生一人でい

つも動いてたんですか。それとも弟子のような人がいたんですか。

志郎 まあ、おつきの方もいらっしやいましたけど、大体お一人が多かったんですよ。

中村 やはり廊の中だったんですね。「ちゃつきりぶし」誕生の有名なエピソードがあったのは。

志郎 はい。(笑)

芸者衆、「ちゃつきりぶし」で

静岡茶のPRに活躍

中村 「ちゃつきりぶし」ができたころ、志郎ねえさんたちは、本当に若い一本立ちしたかどうかの頃だったんですね。

それから静岡の芸者さんたちの芸として、この「ちゃつきりぶし」を全員が習ったんですか。

志郎 はい、習いました。それで、狐ヶ崎つ

中村 ええ。

志郎 そこへ、夕方五時とか三時とか、二時

ぐらいに、やりに行ったんですよ。

中村 ほう、「ちゃつきりぶし」を最初に披露したのは、狐ヶ崎の遊園地ですか。舞台のようなどころで踊ったんですか。

志郎 そうそう、そういうわけね。

中村 同じ頃に東京に行ってレコードに吹き込んだりしたんですね。

志郎 うん、狐ヶ崎より後でしたね、それは。中村 とところで、「ちゃつきりぶし」ができてすぐのときにはね、「きやあるがな

くから」というふうに表示したらしいんですよ。それは覚えていますか。

志郎 はい。「なくから」じゃなく、「なくんて」に訂正しましたね。

中村 それは歌が出てすぐの話だったですか。

志郎 そうです。

中村 じゃ、誰かがこれはおかしいぞって言ったわけですか。

志郎 そうですよ。静岡弁ですもんね。

中村 なるほど。ところで竹栄さんたちの頃は、もう芸者さんの修行を始めると、すぐにこの「ちゃつきりぶし」を習わされたんですか。

竹栄 私っちはね、四歳のときから知ってたんですよ。

中村 四歳のときから知ってた？なぜ？

竹栄 隣が芸者屋さんでね。

中村 ああ、そうか。(笑)

竹栄 うちの父も師匠だったもんでね。

中村 三味線のお師匠さんだったんですか。

竹栄 うんうん、昭和二年でしょ。ちょうど

四歳だけど、はやってたから、もうそれこそ軒並みやってるから覚えちゃった。

中村 じゃ、もう習うなんていう前にできる

ようになつてたわけですね。以前にお会いしたときには確か三味線を弾いてくださったんだけど、三味線なんかもすぐ弾けるようになったちゃったんですか。

竹栄 六歳の六月にね、お師匠さんのところへ伺つて、習いました。

中村 そうですか。すると、基本的には「ち

ゃつきりぶし」については歌つて、それから三味が弾けて踊れるという、この三つは芸者さんとしては誰もができるわけですね。

竹栄 そう。それができないとね、芸者の資格がない。

中村 まさか「ちゃつきりぶし」試験なんて

いうのはあったわけじゃないでしょ。(笑)

竹栄 でも、ちゃんとした「ちゃつきりぶし」



竹栄さん

は、静岡弁で、難しいですよ。

中村 僕も結構難しい歌だと思えますね。

竹栄 そうです。いちいちほら、合いの手が入りますでしょ。

中村 うん。作曲した町田佳声（嘉章）さんが、お座敷の歌として私は作曲したんだと、はつきりおっしゃっているらしいですからね。

竹栄 ねえ。

中村 やっぱり芸者さんたちにやってもらったことを頭に置いてつくった歌なのかなっていう気がしますね。

竹栄 そうね。

志郎 でも、うまくできてますよねえ。

中村 何かつくったばっかりは、三十番まで

あつたそうで。

志郎 もっと、たくさんありますよね。

中村 ほう。だけど、普通は何番までやるんですか。

竹栄 三番まで。

志郎 うん、大体ね。踊りは四番までであるのよ。

竹栄 踊りは四番まで。

中村 あれ、一番、二番と踊りが違うんだっただけ。

志郎 ええ。（笑）

中村 ああ、そうだっけ。ここは一緒なんだから。「チャッキリチャッキリ」というところ。

竹栄 ええ、そこは一緒ですけどね。民謡としては難しいですね。でも、静岡の歌としては、やっぱり静岡弁のところもね、ありますし、そこがよろしいんじゃないでしょうかね。

中村 この唄をお茶の宣伝に使ったんですか。

志郎 東京の三越とか松坂屋とか、いろいろ。そういうところでも「ちゃきりぶし」をやらせていただきました。お茶の品評会とかそういう時に、静岡のお茶の宣伝にね。

中村 そうすると、静岡のお茶さんからお茶

を提供してもらって、その場で分けるなんていうこともやったわけですか。

志郎 そう。袋に入れたお茶を配りました。

わたしたちがお茶の入った袋を配ると、本当にみんな寄ってきましたね。それが初めて、あちこち、専門店会っていうのができてましてね、それでよく一緒にしましたよ。

竹栄

上野の松坂屋でやった時、何度も踊るもんで肌襦袢が湿ってしまってたね。そこで福松おねえさんが干しておいたら、風が吹いて下に落ちてしまってた。「あ、襦袢が舞った」って言ったんだけど、「舞う」ということが、東京の人にわからなかったらしくてね、みんなきょとんとしたたことがありましたよ。（笑）

中村

「ちゃきりぶし」を披露しながら静岡茶の宣伝をしたということは、この歌自体が静岡のお茶屋さんとは、すごく深いつながりがあるという感じがしますね。

志郎

確かにそうですね。随分行きましたよ、方々へ。鹿児島まで行きましたもんね。

中村 それはいつ頃の話ですか。

志郎 戦後。それで、私たちも随分協力しま

したね。北海道へ行つて鹿児島へ行つて、日光のほうも行ったと思います。それからどこだったかしらね。

竹栄 新潟。

志郎 そう新潟も行ったし。何しろ十日ぐらい休んで行くんですもん。

中村 休むつて、こちらの仕事を。

志郎 ええ。

中村 その間は、ちゃんとお線香代つてくれるんですか。(笑)

志郎 いや、そんな、ノーノー。(笑)

中村 ノーギヤラ。

志郎 その代わり見物をね、させていただくでしょ、後で。

中村 ああそうかそうか。観光はできるわけですからね。

志郎 はい。

中村 うん。でも逆に言えば、それだけ普段お茶屋さんの旦那衆と付き合いが深かったということでもあるわけですね。

志郎 そうですよ。

中村 そういう時にはやっぱり普段、お座敷に呼んでくださる旦那さんたちも一緒にくつついてって宣伝に努めているんですか。

志郎 それは、違います。日専連の方々と一緒にしますから。

中村 さつき古いアルバムを見てましたらね、

あねさんかぶりのお茶摘みさんが茶畑に並んでいるのがありましたけど、あれ芸者さんたちがやらせて撮ってた

というのは本当ですか。

志郎 まあ随分その頃は茶畑にも行ったわねえ、みんな。

竹栄 絵はがきになってね。

志郎 みんなのはないけど、何で私たちだけが残つてんのかしら。

竹栄 私たちんときは、もう戦争になっちゃ

ったから。

志郎 ああ、それで。

中村 ないつていうのは何のことですか。志郎ねえさんたちはそのときは何があつたんですか。

志郎 そのとき絵はがきできてたんですよ。竹栄 それもあります。私たちのときのも

で、もうちよつと下の方の。その下の合いの人がね、いるんですよ。みんなきれいな方も。

中村 ああ、お二人のちようど年で言う間くらいの人。

竹栄 ええ、そう。

中村 その人たちが盛んにモデルになったんですね。

志郎 そうね、十人ぐらいたもんね、きれいな方がね。

中村 じゃ、そういう人たちが頼まれて、茶畑に行つて写されたんですね。



茶摘み姿の芸者衆

竹栄 日本平でね。

志郎 私たちもついこの間もちよつと日本平で行きましたけどね。

中村 それは何をしたですか。

志郎 いや、やつぱりその「ちゃつきりぶし」の。

中村 ああ、ビデオか何か撮ったんだ。

竹栄 何で撮ったんだらう。

志郎 何かね、頼まれて出ましたよ。

こはん NHK。

志郎 NHK、そうそうそう。随分協力したの。(笑)でも今誰もいないわね、一人も。

### 静岡の茶業界で活躍した

#### 外国人茶商と芸者衆

中村 志郎さんとか竹栄さんたちがやってら

した頃は、お茶屋さんが一番景氣のいい頃だったんですね。

志郎 今でも景氣いいでしょ。(笑)

中村 いいでしょうねえ。(笑)当時静岡のお茶屋さん、いわゆる大きなお店の旦那さんたちは、お客さんを連れてきて、

皆さんを呼ぶというふうな形で来られたんですね。

竹栄 そういうわけよね。やつぱり私たちが

いると、お話がよくなるんじゃない? 明るくなつて。今だつて誰もいないでこうやつてれば、何だか、ねえ。

中村 陰氣臭い。(笑)。そうすると、例えば

志郎ねえさんが印象に残っているお茶屋の旦那さんが、こんな人を連れてきたという思い出、何かありますか。

志郎 ないわね、あんまりね。

中村 外人さんは結構呼ばれたんですか。

志郎 まあ、外人さんは一人、ハキムっていうのが来てね。

中村 ハキムさんっていうのはどこの国の方ですか。

志郎 ユダヤ系アメリカ人。それでお茶を

いに来たらしいですね。お家があるんじゃない、北番町のほうに。

こはん 水道町だと思っただけだね。

中村 何か大きなお屋敷か何かあったんですか。

志郎 そうです。ハキムさんはとても物覚えがよくてね。「ちゃつきりぶし」だなんてね、どんな歌えるんだもん。外人さんなのにな。

中村 じゃあ、普段の日本語も結構達者だったですか。

志郎 そう、日本語でお話。それでさあ、ハ

キムさんのお客の中でこの人が、じゃあ志郎さんが好きになるとすると：(笑)この人の時に志郎さんと呼んで

あげれば、まあ、話がスムーズにいきますからつていうわけですよ。ちゃんと心得てんのよね。

中村 ほう。それは何、ハキムさんが覚えていてということですか。

志郎 そうなの。外人さんなのにね。

中村 じゃあ、あの人が来るんだつたら志郎を呼べとかつていうわけですか。

志郎 そういうわけね。偉いですよね、日本人以上に何かこう心配りがあつて。そう思いましたよ。終戦後も何度か来て

ましたけどね。

中村 終戦後はもうお茶の輸出はしばらくと

まつてたわけだから、お茶の関係じゃなかつたんですか。

連合軍は昭和二十年十月、食料の見返物資に茶を指定され、二十一年に茶は海を渡っている。

志郎 そう。何かね、もうお茶の関係じゃなく、偉くなつて来たらしいですね。

中村 それじゃ、進駐軍の士官というような



形ですか。

志郎 うん、何かね。

中村 そうですか。お茶屋さんの旦那さんたちで、お客を特に呼ばなくても、自分でもしよつちゆう通つてくるつていうふうな人も結構いたんですか。

志郎 さあ、いたでしようね。私たちはあんまりわかりませんが、ご宴会が多いですよ。

中村 当時、主な宴会の会場となった料理屋さんていうのはどういところですか。浮月さんが一番多かったですね。お庭がありますでしょ。あそこで花火やったり。

中村 花火をやったんですか。

志郎 仕掛け花火ができたんですよ。

中村 ほう、それは浮月さんの主催というよりも、茶業の人が主催したということですか。

志郎 ある程度貸し切りみたいにして。

中村 で、お客さんと呼んで行われるんですね。

志郎 お客さんは外人さんのときもあるし、それから全国のお茶屋さんのお得意さんとかね、そういう方を招待するといふふうにして。



浮月の庭園に勢揃いした静岡芸者衆

中村 へえ。

志郎 だからよかったのよね、お料理屋さんもね。

中村 で、浮月さんのほかに、あとどんな。志郎 浮月さん、求友亭さん。佐乃春さんでも浮月さんが多いね。

中村 大きい古くからの料亭のほかに、いわゆる小料理屋さんというか、小さなお店もたくさんあったと思うんですけど。

志郎 たくさんありましたねえ。軒並み二次会屋さんですよ、いわば。ほら、いろいろめしあがっちゃうでしょ。そうするとあとお話するとか、芸者衆を連れてごちそうしてあげるとか。で、そういうおうちがありましたもんね。お客様も心得てて、そういうわけで、お家へお帰りがもう十二時頃でしょうけどさ、ねえ。今そんな、十二時なんかこの頃は八時にはもう追い出されちゃうもの。(笑)

中村 外国人では、今言った、そのユダヤ人の方のほかに、何か名前を覚えてらっしゃるような方はいますか。

志郎 やあ、覚えてないですねえ。よくいらつしやっただけねえ。

竹栄 へりやさんとか。マッケンジーさんは

もう昔からね、うん。

中村 マッケンジーさんというのとはどんな感じの人だったですか。

志郎 どう言ったらいいのかな。

竹栄 あんまり覚えてないね。(笑)

中村 ここに写真がありますけどね。

志郎 今でも来るんじゃない？釣りに。

竹栄 いや、もう帰っちゃったじゃない。

志郎 帰っちゃったの、もう。

中村 一族で来てたんですかね。

竹栄 奥さんも引き揚げてね。それで静岡市に寄附してくださったのかな。

中村 建物ですね。

竹栄 うん、高松のね。

中村 何だか、茶町のほうにいるとぜんそくが出るということだったらしいですね。

竹栄 そうそう。茶町にいとぜんそくが出て、高松の家に帰ると治っちゃうっていう。だから、海の近くのほうがぜんそくにいいとかね。

中村 ヘリヤさんというのとはどういう人ですか。

竹栄 ヘリヤさんも日本人というとおかしいけど。ヘリヤさんへ勤めてた方もいっぱいいらつしやいましたね。

志郎 大東館の別館が八幡にあつて、そこで

外人さんを接待したこともあるそうですよ。

中村 (傍らの望月氏にむかつて) そうすると、望月さん、ヘリヤとかマッケンジーというのは、いわゆる静岡のお茶屋さんとはどういう関係で仕事をしてたわけですか。

望月 どういう関係だったんだろう、あれ。対等の商売敵っていうことじゃないんでしょう。

中村 いや、あの人たちにお茶を買ってもらってたんだよな。

望月 買って送ってたんだね。

中村 じゃ、静岡の間屋さんたちが集めたお茶を、さらに集めて輸出しているということですか。

竹栄 買って輸出してた、うん。

望月 もともと横浜にいたヘリヤさんたちが静岡へ移ってきたわけですから。

中村 じゃ、大口で仕入れて輸出をするために。

望月 そうそう。最初は静岡とか、富士だとか、そういうお茶を集めて横浜に送ったわけだ。そのうち静岡のお茶の生産量が非常に増えてきたので、彼らが静岡で直接仕入れて清水から出すように

なった。清水港の開港と同時に、いろいろとこつちへ入ってきたっていう感じですね。

中村 そうすると、こういう外国の茶商とは別に、静岡のお茶屋さんが外国の茶商と競合する形でじかに、外国に輸出してたという例もあるわけですか。

竹栄 あると思うわね。輸出組合っていうのがあつたんだから。北番町かどこかにね。

望月 ただそれは、自分たちが直接じゃなくて、やっぱりその人たちを通した商売だったと思つたけどなあ。

竹栄 輸出組合が間へ入つたのかもしれないね。

静岡茶ゆかりの人々

中村 こうした外国の有名な人のほかに、静岡県のお茶の産業としては忘れられない人がいますね。たとえば、中村圓一郎さん(一八九九〜一九四四)。

志郎 三橋四郎次さん(一八四二〜一九二二)。

山口忠五郎。あの人もちよつとやつた



こはんさん                      志郎さん                      竹栄さん

んだよね。

中村    どの人ですか。

志郎    藤枝かしら。

中村    あの、市長をやった山口さんの系統な  
んですか。

志郎    ええ、そうそう。

竹栄    あの山口さんのね、お父さん。岳父。

中村    例えば中村圓一郎さんは、お宅が今の  
吉田町ですよ。

志郎    そうですね。中村さんは、二次会で焼  
き芋を買わせて、入れ菌を抜いて食べ

ていたことがありましたよ。

中村    そうすると、静岡でいろんな仕事をし

た後、皆さんと宴会をやつて、それで  
向こうまで何で帰つたんですか。

志郎    八時何分だかの汽車だよ。汽車で帰つ  
て。

竹栄    藤枝から。藤相鉄道がある。

中村    ああ、藤相線があつたもんね。お宅の  
近くに駅があるんだもん。

志郎    そうそうそう。

中村    ねえ。宴会が終わらんなくなつて、自分  
はもうご飯をあがつて。

竹栄    ちよつと寄つてらして、帰っちゃう。

中村    三橋四郎治さんという方も政治家で、  
随分いろんな活躍をされていますね。

竹栄    三橋さんは、それこそ輸出のほうに力  
を入れられてたんじゃないんですか、  
お茶のね。

志郎    あのうちどうしちゃったかしら。

竹栄    英和の、前にお宅があつたのよ。

志郎    壊されちゃつたでしょうね。すごく大  
きな家だけど。

竹栄    それはね、何だっけ、あの方の出身は。  
堀之内からまだ入つて。

志郎    遠州堀之内。  
竹栄    遠州堀之内からまだ入つて。

中村    菊川のほうね、うん。

竹栄    そうそう、入つたところにあつたの。

中村    こうした静岡のお茶屋さんたちと、張  
り合うような形で、当時景気の良かった  
商売つていふのは何ですか。

竹栄    材木屋さんなんか良かったんじゃない。  
い。

志郎    紙屋さんとか材木屋さん。

中村    その場合の紙屋つていふのは何、東海  
パルプだけじゃないんでしょう。

竹栄    ああ、そういう製紙会社じゃなくなつて  
ね、遊んだつていふのは、その佐野さ  
ん、佐野製紙とか、そういうの。

志郎    そういふのもある、そういうのもある。  
ここにあつたわね、何か。

竹栄    そう、柳町にね。

志郎    うん、何だっけあのおじいさん。

竹栄    あれは小塩さんのこと。あれは安倍川  
工業。

志郎    小塩のおじいさん。

中村    それは何、安倍川製紙の前身ですか。  
竹栄    そうです、そうそう。あの人、ほら、  
自分の何か。

こはん    巴川にいてね、巴川。  
竹栄    巴川が用宗にありますでしょ。だから  
そこから分かれて安倍川工業。

中村 あとは静岡の主な産業っていうと、当時漆器とか、家具類ですが。

竹栄 そうです。漆器、家具ね。うん。下駄。皆さんがずっと仕事をされてきて、支那事変が始まって、それから昭和十六年からアメリカと戦争を始めますよね。戦争がだんだん激しくなっていく中で、世の中の景気がうんと変わっていったのを、実感としていろいろ感じましたか。

志郎 感じますねえ。

中村 やっぱりお座敷なんかはどんどん減っていったんですか。

竹栄 でもね、戦争中は何かかんか、あるにはあったんですよ。うん。

中村 ああそうですか。じゃあ、軍隊のほうの関係ですか。

竹栄 軍隊もそうですけど、やっぱり軍需工場をやっている、ね。

竹栄 そうそうそう、同じ会社でもね。いろいろ軍需工場とか、それなりに繁栄した会社もありますからね。

中村 昭和十五年の一月に静岡の大火というのがありましたよね。あの時は、皆さんはどんな所にいらっしやっただんですか。

竹栄 あのとときは小正月でね、まだお座敷へ

ね、昼間つから行ってる時分で。

志郎 十五日だもんねえ。

竹栄 そうだもんでみんなあわてちゃって、それこそ着のみ着のまま逃げちゃって、何にもなかった。

中村 そのときはどこにいました。

竹栄 今の、どこ、検番のそばですよ、すぐそば。

中村 志郎ねえさんもそうですか。

志郎 そう。一緒の家。何も持たないで。

竹栄 浮月さんのある紺屋町、それから両替町、それから今の常磐町ね。みんな焼きました。

志郎 こっちは焼けなかったんですよ。

竹栄 あそこら辺全部ね、お料理屋か芸者屋でね。その間にぼつんぼつんといういろんな商店があるくらいで、芸者屋がうんとたくさんあったんですが、その大火のときに焼けてしまったんですよ。

それがみんな借家だったから、大家さんが建ってくんなきや戻ってこられないの。で、周りへだんだんドーナツ化になってきてね。それでまた空襲で焼けてまたドーナツ。で、街なかに一軒あるのは、この志郎おねえさんの家だけ。それからもう一つ、求友亭の前



静岡検番前での記念写真

に吉本ってある。その本家が残っているんだけど、もう芸者衆いないもんで。皆さんなくなっちゃったけど、そこだけ。ほかは全部ない。で、武蔵屋さんか今あの。あそこ何ていうの。静岡新聞社のあそこ、紺屋町ですか。あの静岡新聞社のこっち側に高野さんて皮膚科のお医者さんがあったけど、その向かい側が武蔵屋さん。それだけでした

よ、芸者屋は。

志郎 政治家の山口シンジロウさんと三橋四

郎次さんが対抗関係にあつてね、芸者も呼ばれる仲間が違つてた。山口さんは政友会で武蔵屋、あたしがいた吉本は、三橋さんの民政党の側。違つた側に行つたらたいへんだった。

中村 昔はね、いわゆる七間町のあたりに若

竹座だとかき、そういう劇場や映画館が、古いのがありましたよ。そういうところの舞台で踊りを踊るなんていうことはあつたのですか。

竹栄 若竹座はありましたよ。

志郎 ありましたよ。そしてあと歌舞伎座つていうのができたのよ、あそこへね。

竹栄 歌舞伎座つていうのがね。今の毎日新聞。

聞。江崎新聞でね。あそこに歌舞伎座あつたのよ。

志郎 でも、ちよつと、ちよつとだけだったわよ。

竹栄 普段は洋画をやつてた。それで花道もあつて、こう回り舞台もあるから、お

芝居が来るとかけられる。

志郎 でも、それはもう一年ぐらいでもうだめになつちやつて。

中村 静岡の芸者さんたちが年に一回ね、総

踊りみたいなのやるつていうふうなことはあつたのですか。

志郎 ありましたよ。

竹栄 前にあつたんですけど、だんだんそれが。なくなつちやつたつて。

中村 戦前はそういうことあつたのですか。

志郎 それからも随分あつたね。公会堂でね。

中村 ああ、公会堂で。

志郎 おかげさまで、随分よかつたよ。

中村 そのときにお茶屋さんたちがね、花輪を出してくるとか、何かお祝儀をい

つぱい持つてきてくれるようなことはあつたのですか。

志郎 そういふのはなかなかなかつたわねえ。

志郎 公会堂ではやつたもんねえ。それから

竹栄 市の。

志郎 随分やつたんですよ、あそこで。踊りや何か。

みをやるときにね、もんでると、洪が

飛んで、手ぬぐいが茶渋で茶色く染ま

るそうですね。その手ぬぐいで三味線

の糸をしごく切れにくいつていう話を聞いたんだけど、聞いたことありま

せんか？

志郎 糸じゃなくつてね、つやぶきん。

中村 つやぶきんにしたんですか。

竹栄 タンスをふいたりね。糸はそんなこと

しちやいけないですよ。だけど、こ

中村 あれはやつぱり茶渋がついたのがいい

竿のほう、うん。

志郎 うん。よく染めていただいたりしてま

したけど。

竹栄 あの、よく手もみのね、いただきまし

たよ。

竹栄 新しい手ぬぐいを持つてつてさ、使つ

てもらうの。それでこういうタンスを

中村 ああ、やつぱり。それはお茶師さんか

らですか。

志郎 そうそう。

中村 お茶師つていふのは結構やくぎな衆も

いたみたいだけ。(笑)

### お茶をめぐるあれこれ話

竹 栄 ああ、うん。そのお茶師とね、そのも

み手とは違うの。もむ人はお茶師じゃ

ないんだよね。何ていったらいいんだ

ろう。今はもうおじいさんになっちゃ

ったけどさ。お茶師っていうのはね、

そうじゃなくて。

中 村 じゃあ、皆さんがお茶師っていうとど

ういう人をいうんですか。

竹 栄 あたしらが聞いたのではね、問屋さん

や何か間に入ってやる人、何ていうの。

中 村 ああ、口銭を取るような衆をお茶師と

竹 栄 言ったの。

中 村 何、あれは才取りっていうの。

中 村 僕ら田舎で話を聞くとね、手もみやる

竹 栄 ああ、そういうふうだね。

中 村 人によって呼び方に違いがあるんです

ね。それじゃ、その茶渋で染めてもら

うっていうのは、実際にもむ人にたの

志 郎 むんですか。

お茶屋さんがみんなほら、そういう人

中 村 そうかそうか。そんなところにもつな

がりがあるんですね。それから、これ

は朝、朝茶を一杯飲むとね、一日体に

いいなんていうことを言うけど、そう

いうことは芸者さんたちの間では言い

ませんか。

竹 栄 それは芸者じゃなくてもみんなそう言

う。

中 村 お茶をひくという言い方がありませんね。

志 郎 お茶をひくっていうのは、お座敷行か

ないとやらせられるっていうじゃん。

竹 栄 何だっけあれは、有吉佐和子の『香華』

っていうのあつたでしょ。あれで、お

腹が大きくなっちゃってさ、おいらん

が。それで、お座敷へも出られないか

らってね、こうしてね、お茶をひかさ

れる。

中 村 抹茶をひくわけですね。

竹 栄 うん、そういうふうにお座敷へ出られ

ないことをお茶ひきって言ったもんで、

それからお茶をひくっていう言葉が出

たっていうんじゃないかなあかしら。

中 村 じゃ、皆さんの中で、そのお茶をひく

竹 栄 今でも言いますよ。

中 村 きょうは暇だなあっていう意味ですか。

志 郎 きょうはお茶ひいちっちゃたつて。

中 村 ああ、そう言うんですか。

こはん だからお茶って言わないで、おぶうっ

ていうの。おぶうくくださいって。

中 村 じゃ、わざわざお茶という言葉を誰も

言わないようにしてるわけですか。

こはん そうそう。

中 村 ああ。それでさっきおぶうくください

て言ってたんですね。

こはん そう、おぶうくくださいって。

中 村 ああ、何か僕は関西系の人かと思つた

ら、そういうわけではないんですね。

こはん おぶうのおかわりくださいって言った

でしょ。

志 郎 私たちだけだよ。お茶ひかないの。

一度もお茶ひいたことなかったね。

中 村 ところで、これは昭和十四年に作られ

た、宣伝用の写真帖なんですが。

志 郎 これこう。日本髪なんだけどね。わか

らないだよ。

竹 栄 「ちゃつきりぶし」だよ。おねえさん

見ればききとわかるよ、私がほら目

が見えなくなっちゃったからわかんない

けど。

中 村 でもこの本、まだ「ちゃつきりぶし」

ができる前のですよ。大正十四年で

志郎 何て書いてあるの。

中村 茶摘み踊りと書いてありますね。

志郎 誰だろ。きれいな人ばっかじゃん。

竹栄 だから芸者衆じゃないの。

志郎 芸者衆だよ。

竹栄 これ発行が大正十四年じゃあさ、まだ

「ちゃつきりぶし」はできないけれども、おねえさんちは大正十年に出たから。

中村 写っているかもしれませんね。もしかしたら。

志郎 何、浅間山。

中村 ちよっと見せてください。

志郎 「浅間もうで」っていう歌もあったっけね。

竹栄 そうだよ、もうなくなっちゃったけど。中村 賤機山茶摘みの面影と書いてありますね。生き人形じゃないですか、これ。

生き人形。ほら、お人形さんのようなかっこうして、しばらく座ってポーズ取ってるんじゃないんですか。

志郎 誰だろう。

竹栄 賤機山茶摘みの面影なんていいじゃん。

「ちゃつきりぶし」ができない前にも何かやってたんだね。

志郎 うんそうだね、きつと。くまちゃんに

似てるような気もするんだけど。

竹栄 この中におねえさん、いるんだよね。

志郎 いるかもわかんない。

中村 「ちゃつきりぶし」ができるまでは、お茶摘みとか何かに関係した歌や踊りっていうのは、芸者さんの持ち歌にはなかつたんですか。

志郎 なかつたわね。

竹栄 「ちゃつきりぶし」ができて、おかげ

で有名になって。

志郎 似たような感じでは、うちのおかあさんがよく、あんたのようなおへちやがよく、きれいな人の中に入れてもらえるよって言うてね。おへちやだけどつて。

中村 おへちやって何。どういう意味ですか。志郎 おへちやってね、(顔をさして) 此の悪いっていうこと。(笑)

中村 そういう意味なんですか。

望月 へちやむくれとか言うでしょ。

中村 それのへちやか。おへいちゃだと思ひましたよ。

志郎 よく言われた。あんたみたいなおへちやが、よく入れてくれるねえなんて。

中村 いや、そんなことはない。

志郎 ええ、なんて。(笑) 本当。よく言わ

れたよ。だって、本当みんなきれいだもん。自分で見てて、ああ、みんなきれいだなあなんて思うよ。

中村 いや、それはお互いにそういうふうにしてたじゃないですか。ほかに何か芸者さんたちとお茶屋さんとのつながりっていうのはありましたか。

志郎 つながりって、みんなつながっちゃって。(笑)

中村 こちらで芸をお見せする間柄だからという意味で。

志郎 だけどあの頃本当に、皆さん踊りだとかさあ、よくおわかりになったと思うのよね。紙屋さんにしても漆器屋さんにしても、みんな応援していただいてね。静岡じゃこういうの、つくってやるとかさ。

中村 そういう意味じゃあ旦那衆にもいろいろな芸を理解したり、自分もやるという能力もあったというわけですね。

志郎 そうなの、そうよ。ただ飲んで騒いでじゃなくねえ、真面目に、本当静岡かわいがっていただきましたもんね。

中村 ああ。それは大事なことですよね。志郎 シンケさんっていうのがあんだよ、一人。

中村 うん？

志郎 シンケさんてね、お池があつてね、こ  
う離れがあつたところがあつたのよ。  
今稲森パーキングになつちやつてい  
けど。

竹栄 芸のことを一生懸命。

中村 旦那衆ですか。

竹栄 いや、お料理屋で。

中村 料理屋さんなんです。それじゃ、料  
理屋さんで熱心によつた方もいるん  
です。

志郎 ご主人がね、その紙屋さんに習つたの。  
おねえさんの言うのはね、浮月、求友  
さんとは別に、ちよつと広いお家が新  
求さんとか、若松さんとか、あつたの。  
それから新通りのあなごやさんとかね。

志郎 本当、みんな協力していただきました  
よねえ。この頃の人みんなよく。

竹栄 だから、板前さんを置いてある家と、  
置かないで物を取つて芸者衆が入るつ  
ていう家と、二つあつたわけ。

中村 ああ、そうですね。

竹栄 新求さんはやつぱりお料理ができるほ  
う、ええ。若松さんもね。

志郎 みんな本当に協力してくれたもんねえ。  
中村 何か、お話聞いているとやつぱり、芸  
をわかる人、わかつてもらえる人、も

らいたい人、みんなが一体となつてい  
たんですね。

志郎 いたのね。

中村 静岡の、特にこうした夜の文化とい  
うものを支えていますね。

志郎 お料理やの旦那さまがね。遊び人だか  
ら、遊び人。七時かそこらになるとも  
うちゃんと着物着替えてどつかへ行つ  
ちやつて飲んでるでしょ。そういう人  
ばかりだったもんねえ、旦那さんが  
ねえ、それは求友亭さんにしても、浮  
月さんにしてもそうだし。

中村 ああ、その料理屋の経営者ですね。  
竹栄 それで旦那がみんな遊びに行つちや  
うんだから。

志郎 ねえ。遊びに、それだけただ遊んで

るわけじゃないでしょ。だもんだから、  
こういうふうにな、花柳界もしたほう  
がいいよとか、教えていただくわけ  
ですね、おねえさんちに。

中村 研究してるんですね。それは。

志郎 旦那衆の一人が作った「賤ヶ丘」と  
いうのにこんな歌詞がありましたよ。

煎茶番茶は浮世の味よ

美和か薬科本山だから

みるいおほこも蒸されてもまれ  
味な化粧(けはい)に身も細る

ほんにこの世はほろ苦い

ちやちやそうじやいな

ちやちやそうじやいな

中村 うんうん、なるほどうまくできてる。

いやあ、きょうはたいへんおもしろい  
お話をありがとうございます。もつ  
といろいろあると思いますので、また  
続きをきかせていただきたいですね。

志郎 はい。また会いましょう。

中村 ぜひ。

志郎 ねえ。たまには会いましょうよ。

中村 たまにと言わず毎日でも。(笑)

竹栄 おねえさんの写真とね、おねえさんが



若い頃の志郎さん



うたつた歌ね。

志郎 賤ヶ丘のあれをね、ぜひ見てもらいた  
いね。

中村 うん、写真は何とか探してくださいね。  
志郎 わたし一生懸命探してみますよ。

中村 絵はがきで残ってるのがあったら、ぜ  
ひまた見せていただきたいですね。よ  
ろしく願います。お忙しい中本当  
にありがとうございます。

この座談会の後、志郎さんが早速写真を探し  
て下さったので、そのうちの何枚かを掲載いた  
しました。話の内容についてあらためてお聞き  
したいことがあります、再会を約束しましたが、志  
郎さんはそれからまもなく入院され、年が明け  
た一月二十九日に亡くなられました。九十四歳  
でした。御冥福をお祈り申し上げます。

# 「きやアるが啼から 雨づらよ」と新に 静岡民謡が生れた

二十五日から狐ヶ崎遊園で

所かわれば品わかる各地の民謡を  
それく雨地地方能等があるもの  
たが

## 之れ

も教育の促進を  
に教育界で知らぬ間に改まりこの  
國語や方言も響ては其を越つて  
あらう、斯うした時に此國語や方  
言を其地方の民謡に作り上げて永  
遠に残して置くのも意味の深い事  
ではないかと思ふので静岡電報社  
社では新界の大家北原白秋氏の案  
案を乞ひ、去る十月初旬から開始  
て作面は東京放談局日本音楽部製

## 銘打

つて愈公願する  
を中心とする附近の訛や方言を  
れに其土地の名所や習俗を添ひ込  
み静岡民謡と

## 新駿河節

破ごこゆくコリヤササ花見に逢ひ  
にさコリヤササめて櫻のうこん  
ざくらのナアちらぬまにちらぬ  
まにヨイヤサク

## 狐ヶ崎音頭

狐十七ヨ一十手の寺にほんく  
こよい願あけ もちの月  
ほいのほいのほういほうい  
もひさつおまけにほういほうい  
望の月夜はヨーキのふの晩上  
ほんく

## 本社

兼に静岡新聞社本  
社に静岡新聞社本  
社に静岡新聞社本  
社に静岡新聞社本

## イヤザ

ちやつきりぶし  
唄はちやつきりぶし 男は信長  
花はたちばな 唄はたちばな  
茶のかをり  
ちやつきりぶしちやつきりぶし  
きやアるが啼から雨づらよ  
茶山茶ごころ 茶は山ごころ  
ねえね行かづかやアれ行かづか  
お茶つみに  
(以下獅子前と同じ)

第13図 ちやつきりぶしの誕生

(『静岡民友新聞』昭和2年11月22日付)

資料提供：静岡県立中央図書館歴史文化情報センター

# 「ちやつきりぶし」物語

## 一 お茶の歌

### お茶摘みさんと茶摘唄

静岡県には、昭和二年に「ちやつきりぶし」ができる以前にも、たくさんの「茶の唄」があった。お茶摘みさんが茶畑で歌う「茶摘唄」、お茶師さんがホイ口場で歌う「茶採唄」、そして製茶したお茶に混入している不良葉をえりわける時の「仕上唄」と、それぞれの作業とともに数々の「茶の唄」が歌われてきた。しかし、その歌詞はたいへん流動的で、気のきいた文句ならば、どちらの場でも歌われたのである。

お茶を摘むなら 根葉からちゃんと

下手なお方は うわばしる

現在の機械刈り用に上部を平らにならした茶の木には根葉などはないが、明治初期までの茶園では、茶の木は坪植えといって株ごと適当な間隔で生

えていて剪定もしなかったから、時に人の背丈近くも枝をのばした茶樹があった。摘みやすい部分よりも、まずかがみこんで下の方から摘みなさいという教訓的な意味を込めた茶摘唄である。

茶園の経営に必要な労働力は、一番茶の時期に集中し、しかも二十日以上にもわたるため、村の中で仕事を助け合って順番に行うというわけにはいかない。そこで村のそとの労働力にたよらざるをえないのだが、うまいことに茶摘みの時期が山間部にはいるほど遅れるため、平地のお茶が終え、田植えのはじまる直前の人手を、山の方に集めることができた。ちよつとした農家でも四〜五人、大きい家では二十人以上ものお茶摘みさんを雇ったため、この時期若い女性の大移動と言っている程、大勢の娘さんたちが山へ山へと歩いて行った。こうした娘さんたちは、知り合いに紹介されたり、慶庵と呼ばれた斡旋業者の口利きで出掛けたのだが、経済的に余裕のある家の娘でも、この時期になるとまるでそれが当然のように出稼ぎに行



芸者が扮した茶摘み娘

った。お茶摘みさんに行くということは結婚前の女性にとつて、一人前になるための儀礼とでもいうべき意味すらあった。

茶農家に入った彼女たちは、母屋か離れの二階などに泊まり、毎日明るくなりそめる頃から、陽の落ちるまで茶畑で働いた。作業はけつして楽なものではなかったが、家において田畑をうなったり、泥水をこねるような仕事にくらべて力はいらなかったし、なによりもお茶摘みさん、お茶摘みさんとさんづけで丁寧扱われ、同世代の仲間たちと二十日近くも一緒に生活することに大きな魅力があった。

その日に摘むべき場所や休憩時間の指示は、茶農家の主婦が行うのが普通で、その主婦は野良番頭と呼ばれ、娘たちが気を緩めないよう、先頭にたつて働いた。しかし、親元を離れて、解放感にひたっている年頃の娘たちのことだから、つい手よりも口が動き、次の茶摘唄に歌われているような状況にもなった。

天気よければ お茶摘みさんが

赤いたすきで大騒ぎ

そういう時に野良番頭は、無駄口をきいて娘たちの能率を落とさせないようにと、「人と話をするより唄を歌っておくれ」といつて唄をだすことを促した。年配者や声自慢の者が音頭をとってひとふし歌いだすと、「ソーダ、ソーダヨ」と皆がつけ、掛け合いによって歌われていった。

忍び夜づまさんとよー とよ(樋を)来るよー

水はよー しげく呼びや来るよー 呼ばにや来ぬ

(囃し手) オーサ ソーダヨー

ソノ歌ヨー カヤセヨー

しげく呼びやくるなー 呼ばにや来ぬ

静岡市有東木に伝わる茶摘唄の構成は、このように一人が歌うと皆が囃し、「その唄を返せよ」と言われて、歌い手は次から次ぎへと唄を出していく。皆でソーダソーダヨーといっているうちに仕事がかどっていくという寸法だった。茶畑では即興的な文句も含めて、実に様々な唄が歌われた。たまたま異なった村のグループが茶畑で隣合うと、時ならぬ唄合戦になることもあった。村にはそれぞれの気風があり、互いに相手の服装やことばづかいが気になるから、音頭出しが張り切つて自分たちの自慢を歌い、ついで相手の耳こすりになる唄を歌いだすことがあった。

お茶に来る人は ろくな人は来ない

後家かやもめか 宿無しか

お茶に来たとて 小馬鹿にするな

家は金貸し 田地持ち

今年こうでも また来年は

火鉢抱えておかみ様

こうした掛け合いがこうじて一方が帰ると言いだすこともあった。やつと人数を確保したお茶摘みさんに逃げられてはたいへんだと、野良番頭が必死になだめるといふ場面も見られたという。唄は同じ仕事に従っている人々の心をひとつに結ばせるとともに、仕事を円滑に進める上で、大きな効果があった。

## お茶師と茶揉唄

手揉みの技術をもった人を茶師という。江戸時代の末頃に宇治の製茶方法が習得され、これがもとになって明治以降、静岡県の茶揉み技術は飛躍的に発展した。

宇治の茶畑 箒はいらぬ 茶摘み女の袖で掃く

磐田郡下で歌われていたこの唄は、茶摘み娘たちのはなやいだ雰囲気を少しひねって歌っているが、おそらくお茶師によって製茶技術とともに宇治から伝えられたものだろう。

最新の技術を身につけたお茶師は、さらに商品価値を高め生産の能率をあげるために、さまざまな工夫をこらしていき、やがては独自の流派名を名乗る者がでてきた。名前をとった川上流、地名をとった興津流、茶にふさわしい名の青透流など二十以上の名が伝えられている。流派が互いに競い合うことで、静岡県の手揉み技術はやがて全国一のレベルに達し、明治の中頃になると、静岡の茶師が全国に招かれて行くようになった。

静岡県が生んだ製茶上の最大のテクニクはデングリだった。これは製茶の仕上げにあたるコクリの一つ前の段階で、茶の形状を整え針のようにまっすぐ伸ばしていく技術である。両手の中に抱き合わせるように入れた茶を、押し手に力を加えて掌中で茶葉が擦れ合うように押し下げる方法で、押し手をかえる時は、手首をでんぐりかえす（回転させる）。

お茶のデングリもみは 小腕が痛い

もませたくない 我がつまに

というどこでもきかれる唄は、このデングリ法によって腕先がなまるように痛むことをいったものだ。

製茶の場となる焙炉場には何台もの焙炉が並び炭火がたかれる。風があたって茶が乾燥すると品質が落ちるので、焙炉場はたいへんな熱気だ。一焙炉に一貫匁一貫二百匁（四キロ前後）の生葉を入れて、揉み上げるのに約二時間半。これを一日に三焙炉あげるのが普通で大変な重労働だった。フンドシひとつで汗まみれになっての毎日が二十日間ほど続くからお茶師をつとめるとずいぶん痩せたという。

製茶の工程は①フカシ（生葉を蒸す）②葉打ち（焙炉の上で生葉を振って水分を切る）③ころがし（回転揉み）④玉解き（ほぐす）⑤中火（いったんあげて放熱させる）⑥揉み切り⑦デングリ⑧コクリの順であるが、そんな激しい仕事の中で、唄が歌えるのは②の葉打ちの時だけだった。蒸したばかりのまだ青臭さが残るねっとりとした茶葉を、両手でつかんでは焙炉の上に落として水分を切る作業である。大きな茶部屋では並べた焙炉の順にお茶師たちが次々と唄を出していった。

茶揉唄を茶師ともいい、一人が歌いだすと、回りの者がそれに囃しことばをつけていく。それは激しい労働の中での慰安の一時でもあった。

ハアー お茶の出どこはよー安西よーa

ハイハイb

オーヤマ茶町ヨーa

ハアー ソウダネヨーb

ハアー つけてまやすがよーa

ツケテマヤスガドウシタヨーb

つけてまやすがよー 宮ヶ崎a

ハアーモミコモモミコモb

今度はbが別の唄の歌詞のaにあたる部分を歌い、a（またはその他多勢）がbにあたる囃しことばを入れて、歌い手と囃し手が適宜入れ代わっては次々と歌いついでいった。右の唄の続きは、

宮ヶ崎から 車に積んで

牛に引かせて 清水まで

清水港から 蒸気に積んで

海をはるばる 横浜へ

横浜若い衆が 手に手をつくし

目張りすまして 異国まで

唄の中には、江戸時代からの茶の集散地、静岡市安西、茶町一帯に集まったお茶が牛車で清水に運ばれ、そこから船で横浜に送られ、そこで火入れをされてからアメリカ等に出荷されていたことが歌われている。

## 仕上唄

製茶し終えたお茶は俗に隠居焙炉ひいりと呼ばれる低温の焙炉ひいりの上に広げて乾燥させ、これを大海だいかいと呼ばれる大きな紙袋に詰めて出荷する。出荷の前に仕上げとって、乾燥度をより高めるとともに、製品に混入している莖や古葉などの不良葉を取り除く作業をすることがある。仕上み箕みと呼ばれる箕に茶をのせてサツサツと軽快な調子で箕みをおおってより出すのだ。この時に歌われたのが仕上唄で茶摘唄・茶揉唄と同様の歌詞が多いが、テンポは全く異なる調子の唄だった。

きりぎりす羽で鳴くかよ 蝉や腹で鳴く

わたしやぬしゆえ 胸で泣く

わしが鳥なら 焙炉場の屋根でよー

鳴いて口説を 聞かせたい

## レコードに吹き込まれた茶摘唄

大正時代に入ると、茶鋏の普及によって、茶摘みは茶刈りに変わり、茶揉みもまた機械で行われるようになった。もはやゆうゆうと歌いながら仕事をする時代ではなくなったのである。茶摘唄や茶揉唄はしだいに忘れられる運命にあつた。そこで大正十五年、県茶業連合議所は「堪能な人のいる間に面影を伝えよう」と、レコードに保存することを決め、唄の競技会を行った。そして各郡市から集まった中より十一名を選び東京で吹き込みを行ったのである。

この時のレコードは、その後ながく人々に忘れられていたのだが、昨年（一九九九年二月）沼津市の元音楽教諭高崎讓寧さんの努力により七十三年ぶりによみがえった。これを報じた『中日新聞』（二月四日付）によると、高崎さんが発見したレコードは、吹き込んだ三枚のうち「茶摘唄」と「茶揉唄」の二枚で、長年の放置で痛みが激しかったが、NHK静岡放送局のエンジニアの手によって音声の再生に成功し、当時の歌声がよみがえったということである。それによると、茶揉み唄の歌詞には「お茶は静岡お山は富士よ 花はタチバナ茶の香り」などがみられ、白秋の「ちやつきりぶし」が、静岡県に古くから伝わるこれら「茶の唄」も参考にして作られていることが読み取れる。

「ちやつきりぶし」が生まれる前、静岡県にこのような「茶の唄」の歴

史があった。作詞を依頼された白秋は、このようなさまざまな茶に関する唄をノートに書き留め、自分がすでに収集していた全国の民謡をも参照しながら、静岡の茶畑の雰囲気と土地の方言や伝説を巧みに混ぜ合わせながら、歌作りに励んだと思われる。

## 二 北原白秋と静岡

「ちゃつきりぶし」は、昭和二年に作詞北原白秋・作曲町田佳声のコンビで誕生した。そもそもこの曲は、静岡鉄道が清水市に建設した狐ヶ崎遊園地の開園を記念して、その宣伝のために依頼したもので、沿線の観光と産物を紹介したCMソングであった。

静岡鉄道では、当時、詩壇・歌壇に名声を確立していた白秋に作曲をお願いするとあって、芸者を接待にあたらせるなど、たいへんな歓待ぶりであったといわれる。白秋が静岡を訪れたのは、五月下旬頃らしいが、駅前にあった大東館に落ちついたあと、浮月楼で盛大な歓迎会が催された。その後白秋は自分の気に入った新求亭に宿を移すと、会社の案内で市内の一流料亭を飲み歩きながら想をねり、料亭に飽きると今度は遊廓のある二丁町に通うという豪遊ぶりであった。また、昼間は当時としては珍しかったハイヤーに酒や菓子積んで、芸者を連れて気のむくままにドライブに出掛け、気ままに車を止めては、老人、子ども等と話し込むという具合であったという。この姿は当時の人々には、一種の奇行にも見えたらしいが、あらゆる階層の人々に接して、静岡の人情、風俗習慣にふれ、伝説や方言、特にお茶についての知識を得るためであったことが、その後できあがった「ちゃつきりぶし」の歌詞からくみ取れる。

「ちゃつきりぶし」のいちばんの魅力はその歌詞の中にふんだんに盛り込まれた方言のおもしろさであることは、誰にも異論はないであろう。徹底的に静岡方言が採用されているが、その圧巻は何と言っても「きやあるが啼くんで雨ずらよ」の部分である。これは、白秋が二丁町の遊廓で盃を傾けていた時、田んぼで啼く蛙の声を聞いた芸者のメ吉ねえさんが、空を見上げて言ったことばだといわれている。白秋はこれを三十章に及ぶ「ちゃつきりぶし」の各章に“はやしことば”として繰り返し使った。メ吉ねえさんがふと洩らした一言は、本詞部分に工夫を凝らしてみても決定的なポイントが稼げないでいた白秋に「これでいける」と閃きを与え、「ちゃつきりぶし」誕生のきっかけとなったのである。まだ若かった志郎さんが、前半に収録した座談会でメ吉ねえさんのことを語っていた。貴重な証言である。



茶鉢を持った芸者さん

「ちゃつきりぶし」のもうひとつの“はやしことば”に「チャッキリ、チャッキリ、チャッキリヨ」がある。チャッキリとは歌詞の中にあるように「茶つみ鉢の お手の鉢の音のよさ」の擬音である。

鉦を使用する時の音の表現には昔からチヨキチヨキあるいはチャキチャキが使われてきたが、同時に「ちゃつきりぶし」というようなイメージとも重なって、非常に爽快な感じを聞く人に与える。さらにお茶のチャの音とも重なっている。これは白秋の見事な音の選択といわねばならぬ。

このチャッキリチャッキリという音が茶鉦の音であることは誰にでもすぐわかるわけだが、「ちゃつきりぶし」すなわち茶摘み風景の歌と単純な解釈が行われるあまり、これが茶鉦を用いての茶刈り作業の風景であることはほとんど問題にされてこなかった。しかし、昭和二年という時代は、茶業界において、鉦が普及し始めた時代である。もともと低賃金で使われていた若い女性の職場が、日本近代産業の発展にともなって急速に拡大し、彼女たちを傭うのがむずかしくなってきた。そこで作業の能率をあげる道具として鉦が普及したのである。農家では、茶摘みと茶刈りの作業はつきりと区別してよんでいた。その意味で白秋は茶業界における技術革新の象徴である茶鉦の音「チャキチャキ」を、白秋はこの新しい時代にふさわしい歌に使えると考えて、さっそく取り入れたにちがいない。詩人としてのこの感覚は高く評価されてよいだろう。

その他、白秋が作詞にあたってこらした工夫は、歌詞の語数である。つまり一般の茶の唄が七七五という、近世に完成されたきわめて普遍的な型をもっているのに対して、「ちゃつきりぶし」は七七七七五と改めて、四番目の七のころを三番目の七の内容を少しだけ変えて繰り返す方法が使われている。これはすでに梅原三枝氏が「ちゃつきり節」考の中で、「茶摘み日和の、晴れた日和の」とか、「さつた女房の、かはい女房の」というように後ろ四文字を同じにするという繰り返しが全編にリズム感を与え、わかりやすさ、のんびりした感じを加えていると指摘している。

「ちゃつきりぶし」が三十番まであることは静岡人でもほとんど知らな

いかもしれない。ぜひ一度ゆっくり全部の歌詞に目を通してみるといい。私たちのみじかな地名が十六ヶ所、草薙・浅間さま・三保の伝説、数々の名物・風物がこれでもかこれでもかと盛り込まれ、まず白秋のサービス精神の旺盛さに驚かされる。しかし、さすが当代随一の詩人である。観光や産業の宣伝にとどまらず、言葉のもつ独特なリズムをたくみに盛り込み静岡の風土をうたいあげている点は見事である。

なお「ちゃつきりぶし」が愛唱されるにあたっては作曲した町田佳声の功績も大いにあずかっている。この歌は元来が芸者衆に三味線をひかせて歌うお座敷風の歌を意図して作ったものだと町田氏は語っているように、手拍子でにぎやかに歌うことには全く不向きであった。そのため当時は静岡、清水の料亭のお座敷では、花柳徳太郎振付の踊りとともに盛んに歌われていたが、一般にはあまり流行しなかったといわれている。

その後、静岡と甲府の芸者の交歓会があった折に、静岡の郷土民謡として披露されたのがきっかけで山梨県甲府の花柳



ちゃつきりぶしを踊る

界で歌われるようになり、東京では静岡芸者の進出が多い赤坂や新橋、花柳門下の多い吉原でもお座敷唄として盛んに用いられたという。

「ちゃつきりぶし」が今日のように一般に有名になったのは、戦後になつてからのことで、人気歌手の芸者市丸のレコードが全国に売れたのがきっかけであった。昭和三十三年の静岡国体の開会式では、婦人団体が「ちゃつきりぶし」の唄と踊りを披露し、全国に静岡の郷土民謡として名を高めたのであった。

作者北原白秋は「ちゃつきりぶし」の戦後の流行を知ることなく昭和十七年、五十八才で亡くなっている。

### 三 「ちゃつきりぶし伝説」

志郎さんの回想に出てきた二丁町の遊廓における白秋の話は貴重な証言である。そのことに関係することを少し紹介しておこう。

漆畑弥一氏の「駿府の花街」(『ふるさと百話』第3巻所収)に、女郎の静岡弁という題の興味深い話載っているので引用する。

づないお客でやつきりしたが、やつとねかしてエレごせつばい。問夫のへやへといせいできたら、明の鐘だよヤレおとましいー大正の頃、仙台古今亭今輔が静岡へ来ると高座でよくやつたものである。

次は、「ちゃつきりぶし」の第十六番である。

夏ぢゃ、五月ぢゃ、新茶ぢゃ、粉茶ぢゃ、

やアレ、えれえれ、しもて、えれえれ、ごせつばい

えれえれ、というのは囃子ことばで、静岡市郊外の有東木に伝わる盆踊りで古くから歌われてきた文句の中にもでてくる。また、江戸時代の滝沢

馬琴も、駿府方言丸出しの女郎の言葉を面白がって書き留めている。漆畑氏が紹介する古今亭今輔のエピソードが実際に大正期のことであるなら、静岡方言を遊女の言葉のなかで、やや揶揄的に使うという趣向が、おそらく二丁町でもよく知られていて、白秋がそれを聞かされた可能性は非常に高い。したがってもしかしたら、この今輔の言葉も「ちゃつきりぶし」成立に一役買っていたかもしれない。

漆畑氏によると、白秋の登楼先は毎晩変わり、たまたま小松楼(吉田楼だともいう)に白秋ファンの文学花魁がいて、商売気をはなれて白秋をもてなしたので、白秋は幾日も流連(いつづけ)したりした。そして、あの「きゃあるが啼くんて雨づらよ」は、この二丁町で聞いた老妓のことばから生まれたと書いている。この老妓というのが志郎さんの話に出てきたメ吉さんをさすのは間違いない。

さて、「ちゃつきりぶし」の注文主であった静岡鉄道(当時は静岡電鉄)が昭和六十二年に発行した『ちゃつきりぶし』と題したリーフレットによると、「きゃあるが啼くんて云々」誕生の場所は、二丁町の蓬菜楼で、土地つ子芸妓のメ吉が二階の障子を開けながら、だれに言うことなくつぶやいた言葉であったという。

藪田義雄氏の『評伝 北原白秋』(玉川大学出版部、昭和四十八年発行)には、宝(ママ)菜楼で日暮れ前から盃を挙げていた白秋の酒席にはべつていた老妓のひとりがつと起つて障子を開け、件の言葉を独語した。白秋ははたと膝をうち、傍らの芸妓に命じて宿から鞆を届けさせ、それから人が変わったように原稿用紙に取り組み、幾日も案じた末に、囃言葉を生み出した。「このときの芸妓を白秋はお福といっていたが、静岡で聞いたところではメ吉だという話だった」と書いてある。文面からして藪田氏は静岡で直接取材しようだから、芸妓の名がメ吉であることは確かであろう。老妓というのは相当年配の芸者をさすわけで、志郎さんも「お婆さん」と



いつていたが、まだ三十歳そこそこだったのだから、少々気の毒な気もする。

この「きやあるが啼くんで云々」誕生の話は、やがて尾ひれがついて一種の伝説と化した。作曲者の町田佳声が昭和四十一年に書いた「ちやつきりぶし覚え書」でこんな話を紹介している。昭和八年か九年、当時NHKの放送課長をしていた久保田万太郎から聞いた話として、久保田があゝの泉鏡花と日本橋で飲んでいたら、「泉先生がちやつきりぶしの話をして、これは昔静岡の弥勒町似遊んで流連をしていた俳諧師が、相手の花魁が障子を開けて『きやあるが啼くか雨づらよ』といったのを俳諧師が面白く思つて唄にしたのだそつだ。と真面目くさつていうので、僕は白秋が作ったことを知つてはいたが、泉先生に恥をかかせる訳にはゆかず、フンフンと聞いていたよ。」と言われたということを書いている。

「ちやつきりぶし」ができてわずかに六年あまりで、泉鏡花という大作家がこんな誤解をしているくらい、「きやある云々」誕生秘話が広まっていたらしい。もしかしたら、白秋自身が面白がつて話したのかも知れないが、今は確かめる術はない。

## あとがき

座談会を中心にして資料集の一号を発行することができました。御協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。ただ、小誌を志郎さんに御覧いただけなかったことが本当に残念でした。今後もたくさんの方々にご協力いただき、刊行を続けたいと考えております。

## 編集委員

静岡茶商工業協同組合  
静岡市茶流通業史編集委員会

委員長	山梨宏之
副委員長	加納昌彦
指導	中村羊一郎 (日本民俗学会代表理事)
副理事長	望月浩
委員	牧野直
委員	小島康平
委員	谷本宏太郎

# 「ちやっきりぶし」ができた頃

発行日 平成十二年三月二十七日

発行 静岡茶商工業協同組合

〒420-0005 静岡市北番町81

TEL(054)271・1955

FAX(054)254・5054

編集 静岡市茶流通業史編集委員会

印刷 日本レーベル印刷株式会社



本物が恋しくなったら

**静岡茶**